こころの未来研究センター滞在記

増田貴彦（アルバータ大学心理学部准教授）
Takahiko MASUDA

約５か月間の京都滞在から昨月カナダに戻り、すっかり秋めいたエドモントンにてこの体験記を書いています。朝の気温はすでに０度以下になり、楓が日々色づいてきているカナダ北部にいると、つい先日までセミたちが激しく鳴く木々の下を、烏丸丸太町の借家から京都御苑の砂利道の轍をなぞるように自転車を漕いで、汗をかきかき関田町のセンターに通っていたことが、夢のように感じられます。

ふだんこの滞在記を寄稿される外国人研究者とは違い、私は日本生まれの日本育ちです。そして京都大学は私の母校です。私は、1994年より京都大学大学院にて研究を始め、1997年にフルブライト奨学金でミシガン大学大学院へ留学、2003年に同大学より博士号を取得しました。そして2005年以来、カナダ・アルバータ大学にて教鞭をとっています。かれこれ通算10年以上、北米暮らしを続けておりますが、今回、初めてのサバティカル期間に、幸運にも日本学術振興会招聘研究員として京都大学こころの未来研究センターに滞在させていただき、ようやく念願だった懐かしい京都での生活を再び経験できました。

こころの未来研究センターに滞在して

今回の滞在は、同センターの内田由紀子准教授、アジア・アフリカ研究センターの高田明准教授とともに、「親子のコミュニケーションを通してこどもたちが北米及び日本特有の注意の向け方を身につけていく過程」を研究するプロジェクトを立ち上げることが目的でした。過去の文化心理学研究では、北米の人たちに比べ、日本人は対象となる現象の状況要因や背景要因にまで注意を向ける傾向があることが報告されています。しかし、そうした注意の向け方の文化差が子どもの発達のどの時点から観察され、それはどのような過程を通して身に付いていくのか、についてのデータはまだ十分ありません。そこで、今回、就学期の子どもたち（７歳〜10歳）を対象として、認知課題を子ども１人で遂行する場合と、親子で会話を通して遂行する場合で注意配分にどのような違いが生じるか、また親からの影響は年齢によって異なるのかを明らかにするための研究を企画しました。

アルバータ大学大学院生たちとの貴船・鞍馬めぐり

センター長であります吉川左紀子先生からは、昨年度の一般公募連携研究以来、さまざまな形でご援助をうけ、このプロジェクトが確実なものとなるサポートをいただきました。またセンターの先生方には、学際的な雰囲気の中で、トークの機会、授業の機会、セミナーへの参加の機会をいただけましたことを感謝しております。さらに、センターを足がかりにして経済学部・教育学部・総合人間学部の先生方と交流ができましたことも非常に貴重な体験でした。特に剣道の稽古づけのように質問をぶつけてくる若手研究者たちからは、多くの刺激をうけました。

ハイネ博士との再会、そして京都大学・アルバータ大学合同セミナー

今回の滞在で、縁の大切さを感じましたのは、私の大学院生時代に、研究員として京都大学に赴任していたブリティッシュ・コロンビア大学のハイネ博士と、再び京都で出会えたことです。このハイネ博士こそ、私が北米に留学をする意思を固める足がかりを作ってくださった方であり、また博士はアルバータ大学が母校であったという話を聞き及ぶにつ

け、博士との縁の深さを感じております。博士は、現在、文化心理学の分野の国際的なフロントランナーです。博士が私と同時期に来日しており、同じオフィスで再び机を並べて時間を共有できましたことは、本当に幸運だったと思っております。

また、今回の滞在中に、アルバータ大学の３人の大学院生たちを京都大学の皆様に紹介することができましたこともありがたく思っています。３人は、内田准教授の主催するセミナーにて研究発表を行い、大学院生の皆様との交流、京都の観光もできました。こうした経験は、彼らの日本文化理解に大いに役に立ったことでしょう。これからも、京都大学との連携プロジェクトを継続することで、大学間の結束を固く結んでいきたく思っている所存です。そして、そこにはまた新たな縁が生まれることと思います。

日本文化にふたたび触れて

今回の滞在が学生時代とは違い新鮮であったのは、家族とともに京都生活を体験できたことです。歴史好きの妻は、私たちの借家の界隈だけでも歴史的建造物と生きた京都文化が重層的に折り重なっているさまにおおいに刺激をうけ、充実した日々を送れたと申しております。また子どもたちも、京都の子どもたちとの交流を通し、日本語の能力（京都弁）を伸ばすことができました。特に、樂美術館での粘土を使った手捏（てづく）ね体験、下御霊神社の還幸祭神幸列巡行に稚児として参加したこと、そして如意ヶ嶽での送り火の手伝いができたことなどは、きっと記憶に残る貴重な体験になったと思います。

私自身も桂離宮・修学院離宮・仙洞御所・京都御所の見学、流鏑馬神事、葵祭、祇園祭の観覧、南禅寺・相国寺・大徳寺での座禅などを楽しむことができました。また自転車を走らせて近くの豆腐店・味噌店・醤油店・生麩店で食材を求める経験や、なんといっても銭湯通いは、カナダでは味わえない楽しみでした。このような発言は、外国人が京都見物をしているみたいだと揶揄されてしまうかもしれません。しかしながら、海外滞在期間が長くなっている私にとっては、こうした体験は、自らの身体にしみついた文化歴史的な背景を確認していくための重要な作業です。また文化心理学という学問の見地からいうと、こうした体験は、伝統と革新の繰り返しの中で文化を育んできた京都の町を通して、日本の文化の核になる部分に触れ、これまでの文化比較研究では十分な議論がなされていない部分をあぶりだしていく、いわば日本文化のフィールドワークなのです。そして、こうした作業は、科学的手法という制約のある実験心理学と文化のより深い部分を探求する人文学との融合への足がかりともなると思っています。その意味でも今回の滞在は貴重な体験でした。

ハイネ博士と訪問した西芳寺にて

おわりに

京都はなかなかに離れがたい町です。あれほど辟易した夏の暑さも今となっては懐かしいです。そしてセンターの先生方・スタッフの皆様ともお目にかかれなくなるのは寂しいかぎりです。滞在中、本当にお世話になりました。今回築きあげた共同研究のプログラムを通して、再び京都を訪れる機会がありますことを期待しております。そして学際的な研究環境で、こころの未来研究センターがますます発展していきますことを祈っております。

センターの皆様と